

熊本県自主文化事業

ベートーヴェン
第九

昭和62年12月26日(土)午後6時30分
熊本県立劇場コンサートホール
主催：熊本県・県民第九の会・県文化協会

みどりの周波数

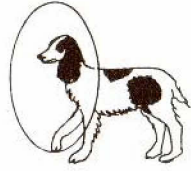
RKK

熊本放送

熊本市山崎町30 TEL 328-5511 (受付案内)

くまもとを、
一番良く知っています。

くまもとを、見る。聞く。話す。
RKKは、くまもとの、
その日のこと明日の動きを、
いち早くお茶の間にお届けします。
皆さまの信頼を電波にのせて
今日も、夢を、大空へ。RKKです。



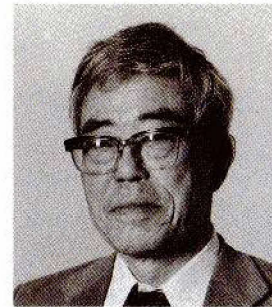


熊本県知事
細川護熙

熊本県立劇場とともに誕生しました「県民第九の会」による「ベートーヴェン第九」の演奏会も今年で第六回目を迎えることができました。年末になりますと日本各地から「第九」の声が聞こえてまいります、ここ熊本でも県民総参加による演奏会として、またその年の県音楽界を締めくくる催しとしてすっかり定着した感があります。

今年アマチュア文化の祭典「第2回国民文化祭」が地方では初めて熊本で開催され、県民の皆様のお力添えのもとに無事盛会裡に終えることができました。この記念すべき年の最後を飾るイベントとして、さらには新しい熊本文化の躍動の年を迎えるステップとして、御一緒に「歓喜の歌」を高らかに歌いあげたく存じます。

これからも熊本文化の発展のため皆様方の温かいご支援をお願い申し上げます。



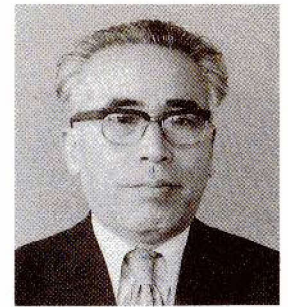
熊本県文化協会会長
岩下雄二

県立劇場のコンサートホールで、県民が演奏する「第九」を聴くことは、もう我々の年末の大きな喜びとなっている。県立劇場の完成を祝って始まったこの演奏会も、今年で第6回を迎える。

県文化協会は、県下の各文化団体と協力して、年間を通じ数多くの文化行事を開催しているが、之もその一つであり、その年の最後を飾るものである。ベートーヴェンが、人類に贈る「歓びの歌」として作曲したこの曲を、県民に贈ることが出来るのも、これまた喜びであり、県民第九の会と県立劇場に深い感謝を捧げたい。

聞くところによると、第九は聴く者よりも歌う者の方が感動が大きいそうで、演奏が終わった後も、暫くは興奮がさめないということである。第九は贈るものにとっても、贈られるものにとっても大きな喜びである。今回も、県下各地から何百人もの方が演奏に参加され、苦勞して練習された成果を発表されるわけであるが、将来はもっと多数の方が参加されて、名前のとおり「県民の第九」となってほしいものである。

「県民の第九」に光榮あれ。



県民第九の会実行委員長
有馬俊一

今年も第九の季節がめぐって参りました。全国的な第九ブームで、年末になると「Freude, schöner Götterfunken…」歓喜の調べが各地に響きます。

精進けっさいして新しい年を迎えたい、という日本人の心情にマッチしているからでしょうか、第九を聴きたい、歌いたいという人は年々増えて、私達の第九にも、今年県下各地から300名近い応募がありました。遠隔地から熱心に練習に通う人もあって感激させられますが、斯ういう人達の熱意に支えられて、第6回を開催することが出来たと思います。

指揮に安永武一郎氏、独唱者に中沢桂、木村宏子、近藤伸政、栗林義信の四氏、ともに日本一流の方々をお迎え出来て喜んでます。オーケストラの熊本交響楽団、合唱の県民第九の会合唱団、メンバーの中には勿論専門の音楽家もありますが、大部分はアマチュアで、会社員、主婦、学生、教師、医師等他に仕事を持つ人達です。通常、素人の演奏は余興の域を出ないものですが、第九は別です。演奏する者の努力と熱情によって、技術を超えた感動を与えてくれます。聴く人の心に訴える魂の音楽にすることも可能です。私達はそういう演奏にしたいと、9月以来練習に励んで参りました。未熟な点は何卒ご寛容下さいまして、皆様方の温かいご声援をお願い申し上げます。慌しい年の瀬のせめてこの一時を、音楽とともにお過ごしなればと存じます。

指 揮 安 永 武一郎

独 唱 ソプラノ 中 沢 桂子
メ・ソプラノ 木 村 宏子
テノール 近 藤 伸政
バリトン 栗 林 義信

合 唱 県民第九の会合唱団

合唱指揮・岩代和武
ピアノ・杉野恵美

管弦楽 熊本交響楽団



昭和61年12月27日〈県民第九の会演奏会（指揮＝荒谷俊治）〉から



指 揮 安 永 武一郎

大正11年長崎県生まれ、福岡で育つ。

東京音楽学校（現、東京芸術大学）を卒業後、再び昭和26年より1年間東京芸術大学に学び、ピアノを水谷達夫、指揮を故金子登、渡辺睦雄、クルトヴエスの各氏に師事する。

昭和31年より九州交響楽団の常任指揮となり、定期演奏、巡回演奏、音楽教室、オペラに活躍し、常任指揮者を連続26年間つとめ、「九響育ての親」といわれ、現在の九響の根幹を築いた。

その間、東京交響楽団、大阪フィルの放送の為の指揮をし、かつ熊本交響楽団、長崎交響楽団をそれぞれ約10年間指揮、豊橋交響楽団の名誉指揮者でもあり、昨年は豊橋市の市制80周年に招かれ、父・武一郎の指揮で子・徹（ベルリンフィル第1コンサートマスター）の親子競演で会場を沸かし、大きな反響を呼んだ。

昭和40年から1年間ウィーンアカデミー指揮科に留学し、スワロフスキーに師事し、トーンキュンストラ（国立オーケストラ）を指揮している。

昭和55年福岡市文化賞を受賞し、現在は、九州交響楽団の名誉指揮者であり、福岡教育大学の学長である。

中沢 桂 (なかざわ・かつら)
ソプラノ



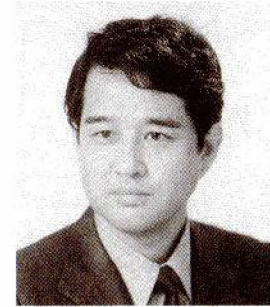
東京芸術大学卒業。
1959年「ルサルカ」(ドボルザーク)〔日本初演〕のルサルカでデビュー。ひき続き「リゴレット」(ヴェルディ)のジルダを好演。
1960年、チェコの音楽祭「ブラーハの春」の第13回国際コンクールで第3位に入賞。
帰国後の活躍は目覚ましく、「魔笛」(モーツァルト)の夜の女王、「ドン・ジョバンニ」(モーツァルト)のドンナ・アンナ、「カヴァレリア・ルスティカーナ」(マスカーニ)のサントゥツァ等を歌い、また日本のオペラでも、「修禅寺物語」(清水 脩)の楓、「夕鶴」(團伊玖磨)のつうなど、なくてはならない存在となっている。
また、コンサート・シンガーとしても全国各地でリサイタルや、ベートーヴェンの「交響曲第9番」やヘンデルの「メサイア」などでのオーケストラとの共演等で活躍し、オラトリオや宗教曲になくてはならない存在として、我が国ソプラノ界の第一人者としての地位を保っている。
1976年、チェコ・スロバキア共和国よりスメタナ賞を、1977年には第5回ウィンナーワールド・オペラ賞を受賞している。
二期会会員・ピクチャー専属

木村宏子 (きむら・ひろこ)
メゾ・ソプラノ



東京芸術大学卒業。関種子、佐々木成子に師事。
1957年文化放送賞受賞。
1959年「フィガロの結婚」のケルピーノでオペラにデビュー。美しい声と広い音域、豊かな音楽性と表現力を持ち、その後、「椿姫」のフローラ、「ロング・クリスマス・ディナー」(ヒンデミット曲)のジュネヴィエーヴ、「ラインの黄金」のフロースヒルデ及びウォークリンデ、「蝶々夫人」のスキ、「こうもり」のオルロフスキー、「ナクソス島のアリアドネ」(R. シュトラウス)の作曲家、「ファウスト」のジーベルなどを歌っている。
他方コンサートの分野でも我が国第一級のメゾ・ソプラノ歌手として高い評価を得ており、1959年から5年間N響の「第九」のソリスソとして連続して出演したのをはじめ、主要交響楽団との協演により、「レクイエム」(モーツァルト・ヴェルディ)、「メサイア」(ヘンデル)、「クリスマスオラトリオ」(バッハ)、「変ホ長調ミサ」(シューベルト)他多くの曲を演奏しており、この分野に於ても不可欠の存在となっている。
また'74年の「毎日ソリスステン」と'78年6月に行ったリサイタルでは、ドイツ歌曲の真髄に迫り絶讃をあげている。1982年「デイドとエネアス」の名演奏によりウィンナーワールド・オペラ賞を受賞。
二期会会員

近藤伸政 (こんどう・のぶまさ)
テノール



東京芸術大学音楽科卒業 同大学院ソロ科修了。
伊藤巨行に師事。
1976年、「オーリー伯爵」(カヴァリエロ)や1977年、二期会オペラの「フィデリオ」(ヤッキーノ)でデビュー。その後、「魔笛」(僧侶)、「デイドとエネアス」(水夫)その他に出演。1978年には「ペレアスとメリザンド」のペレアスを演じる。
1978年、西ドイツ政府給費留学生(DAAD)として渡独。同年12月のシュトゥットガルトにおける「メサイア」を始めとし、バッハのカンタータ、シュッツの「ヨハネ受難曲」(エヴァンゲリスト)、モーツァルトの「レクイエム」「戴冠ミサ」など、在欧期間に500回を数える公演を行う。
西ドイツ国立シュトゥットガルト音楽大学音楽科卒業、同大学リート・オラトリオ解釈課程修了。
1980年、ドイツワーグナー財団より奨学金を得て、パイロイトの夏のフェスティバルに招待される。
1981・82年と続けて日生劇場の招きにより一時帰国、松井和彦作曲のオペラ「泣いた赤鬼」の初演及び連続公演を行う。
1980年より83年はドイツと並行してイタリアのミラノ・モデナに留学。
この間、K. リヒター氏に師事。
1984年1月に帰国。「ピパ!ラ・マンマ」(ドニゼッティ)、「ねじの回転」(プリテン)、「黒蜥蜴」(青島広志~初演)、そして日本モーツァルト協会のオペラ「羊飼いの王」に出演。演奏会形式による「ヴォツェック」「エレクトラ」「サロメ」(小澤征爾指揮・新日本フィル)、「スペインの時計」「子供と呪文」(若杉 弘指揮・都響)等にも出演。コンサートでも「第九」「メサイア」や「グレの歌」(秋山和慶指揮・東響)等で活躍している。
二期会会員

栗林義信 (くりばやし・よしのぶ)
バリトン



東京芸術大学卒業。
矢田部勤吉、柴田睦陸に師事。
1956年、音楽コンクール第1位受賞。
1957年、文化放送音楽賞受賞。
1958年、イタリ に留学。ヴィオッティ国際声楽コンクール金賞受賞。毎日音楽賞受賞。
声は圧倒的な音量と輝きを放つバリトンで、オペラ・デビューは「トスカ」のスカルピアであった。
1961年帰国。全国にわたる多岐の演奏活動を行う。
又、ソ連、中国、東南アジア諸国でもオペラを歌う。
1973年、毎日芸術賞、1976年、第7回サントリー音楽賞、1982年、第32回芸術選奨文部大臣賞など栄えある賞を独占。これまでに、「トスカ」、「椿姫」、「リゴレット」、「オテロ」、「ドン・カルロ」、「マクベス」、「蝶々夫人」、「イル・トルヴァトーレ」などイタリアオペラのレパートリーは20曲を越し、「夕鶴」、「蒼き狼」など邦人作品でも重要な役割を果たしている。又、コンサートにおいても、リサイタルや「交響曲第9番」(ベートーヴェン)、宗教曲などで全国主要オーケストラとの協演も多い。
二期会会員

1. エグモント序曲 作品84

ベートーヴェン

2. 交響曲第9番二短調「合唱付き」作品125

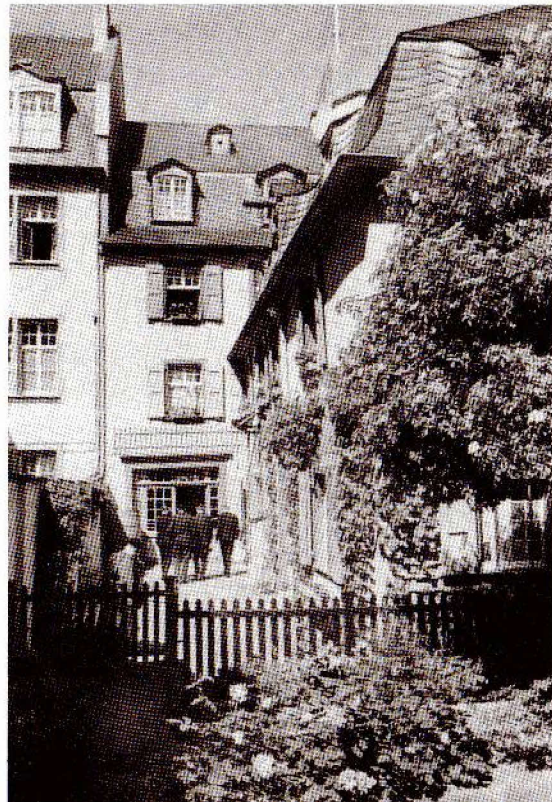
ベートーヴェン

第1楽章 Allegro ma non troppo, un poco
maestoso

第2楽章 Molto vivace

第3楽章 Adagio molto e cantabile

第4楽章 Finale

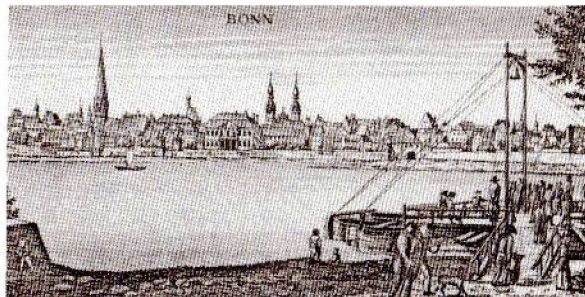


ベートーヴェンの生家（ボン）

ベートーヴェンは1770年12月16日、ドイツのボンで生まれた。1970年にはベートーヴェンの生誕200年を記念した様々な催しが全世界で行われた。

ボンで行われた“第九”の演奏会には日本からもある大学の合唱団が参加した。その演奏会の模様がラジオで中継されると、ボン中の人々は自分の家のラジオのボリュームを一ぱいに上げると、窓辺に外へ向ってそのラジオを置いたという。

ボン中にベートーヴェンの“第九”が鳴り響く様子を思い浮かべると、実に壮観で感動的であったに違いない。同時に、ボンの人々のベートーヴェンを誇りに思う気持と愛する気持が手に取るようにわかる。



ライン河の埠場から眺める対岸のボン市全景 1800年頃

■シラー＝《歓喜に寄す》

対訳＝大宮真琴

O Freunde, nicht diese Töne! Sondern
lasst uns angenehmere anstimmen, und
freudenvollere.

Freude, schöner Götterfunken,
Tochter aus Elysium.
Wir betreten feuer-trunken,
Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brüder,
Wo dein sanfter Flügel weilt,

Wem der grosse Wurf gelungen,
Eines Freundes Freund zu sein,
Wer ein holdes Weib errungen,
Mische seinen Jubel ein!
Ja, Wer auch nur eine Seele
Sein nennt auf dem Erdenrund!
Und wer's nie gekonnt der stehle
Weinend such aus diesem Bund!

Freude trinken alle Wesen
An den Brüsten der Natur;
Alle Guten, alle Bösen
Folgen ihrer Rosenspur.
Küsse gab sie uns und Reben,
Einen Freund, geprüft im Tod;
Wollust ward dem Wurm gegeben,
Und der Cherub steht vor Gott.

Froh, wie seine Sonnen fliegen
Durch des Himmels prächt'gen Plan,
Laufet, Brüder, eure Bahn,
Freudig, wie ein Held zum Siegen.

Seid umschlungen Millionen!
Diesen Kuss der ganzen Welt!
Brüder über'm Sternenzelt
Muss ein lieber Vater wohnen.
Ihr stürzt nieder, Millionen?
Ahnest du den Schöpfer, Welt?
Such'ihn über'm Sternenzelt!
Über Sternen muss er wohnen.

バリトン独唱

おお、友よ、この調べではなく、
さらに快い、さらに歓びに満ちた調べを
ともに歌おう！

バリトン独唱・合唱

- ①歓びよ、神々のうるわしい輝きよ！
楽園の娘らよ！
われらみな、感動に酔い、
天の高みの神殿に踏み入ろう！
- ②この世に厳しく引き離された者らを、
神秘なる御身の力は、再び結び合わせる。
御身の優しい翼の憩うところ、
すべての者らは、同朋（はらから）となる。

四重唱・合唱

- ③大いなる天の賜物をうけた者らよ、
真空の友情をかち得た者らよ、
女の優しい愛を得た者らよ、
歓びの歌を、ともに歌え！
- ④しかり、たとえ、ただ一人の魂でさえも
地上の友と呼べる者を持つことができるならば！
だが、それさえ持つことのできなかつた者は、
涙しつつ、足音をしのばせ、立ち去るがよい！

四重唱・合唱

- ⑤すべてこの世に在るものら、
自然の胸から歓びを飲み、
すべての善人も、すべての悪人も、
歓びの薔薇の小径を行く。
- ⑥歓びは、われらに、口づけと葡萄酒と、
そして、死さえも奪い去ることのできぬ友とをあたえ、
虫けらにさえも楽しみがあたえられ、
天使ケルピムは、神の御前に立つ。

テノール独唱・男声合唱

- ⑦歓びよ、歓びよ、神の太陽たちが、
壮大な天の軌道をたのしく飛びかうように、
- ⑧同朋（はらから）よ、おのれの道をすすめ、
歓びに満ちて、英雄が勝利の道をすすむがごとくに。

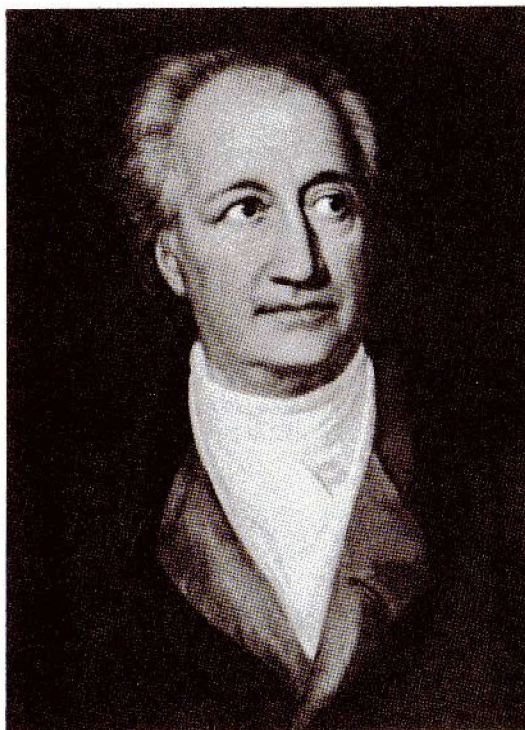
合唱

- ⑨たがいに手を取り合おう、億万の人々よ！
この口づけを、全世界にあたえよう！
同朋（はらから）よ、星のかなたには、
愛する一人の御父が住み給うのだ。
- ⑩ひれ伏して祈るか？ 億万の人々よ。
創り主を心に感ずるか？ 世界の民よ。
星空のかなたに、主をさがし求めよう！
星たちのうえに、主は住み給うのだ！

1. エグmont序曲 作品 84 ベートーヴェン

史上に実在したラモラル・エグmontは1522年の11月18日に生まれ、1568年の6月5日に処刑されたオランダの貴族の出の軍人、政治家であり、オランダ独立の礎ともなった人である。ゲーテはこの史実をもとにして、エグmontを主人公にした悲劇を書いた。ウィーンの宮廷劇場の支配人ヨーゼフ・ハルトルはこの「エグmont」を、ウィーンで初めて上演するために、その音楽をベートーヴェンに依頼し、ベートーヴェンはこれを1809年の暮から翌年にかけて作曲した。

この曲は、序奏をもったソナタ形式によって書かれているという点において、ベートーヴェンの他の多くの序曲に共通するものをみせている。序奏はソステヌート・マ・ノン・トロppo、 $\frac{3}{4}$ 拍子、 $\frac{3}{4}$ 拍子のかなり自由な幻想的なものであり、そのおわり近くでは、主部の予備がなされ、そのままアレグロ、 $\frac{3}{4}$ 拍子の主部に流れこむ。しかし、主題の動機は、序奏と主部とを含めて、それぞれにきわめて強い関連性をもっており、展開部は短いが全体的に充実した構成をみせている。そして短い和声的な接続部分をおき、最後は、アレグロ・コン・プリオへ長調、 $\frac{3}{4}$ 拍子の晴れやかで勇壮でもあるコーダにはいり、気分を一変して曲とする。



ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ

2. 交響曲第9番二短調「合唱付き」作品125 ベートーヴェン

ベートーヴェンは、一つ一つが内容と性格を異にする八つの交響曲を書き終えたのち、生涯の最後に、九番目の交響曲に着手した。

1793年に、ボンのフィッシェニヒは、シラー夫人に手紙で「彼は歓喜をも、しかも各節残らず作曲するでしょう……」と告げていることにより、ベートーヴェンは生地ボンにいたときから、すでにシラーの詩「歓喜に寄す」に作曲したいと思っていたことがわかる。

1822年に、ロンドンのフィルハーモニー協会は、ベートーヴェンに新しい交響曲の作曲を依頼してきた。このことで、今までベートーヴェンの頭の中に、うかんだり、消えたりしていた合唱付きの交響曲の構想が、いっきよに実現することになった。そして1823年から24年にかけて、この巨大な交響曲が完成した。シラーの「歓喜に寄す」に作曲する意図をいだいて、完成するまでに、じつに30数年にわたっていることになる。

この曲は、ベートーヴェンの音楽における技法と精神の最も円熟した時代の作品であって、その内容が雄大な精神と、大胆にして洗練され、全く独創に富んだもので、いく多の目新しい技法がそこに示され、その楽想は当時の常識を全く超えたものであった。四人の独唱者や大規模な合唱団を用いたり、終曲の初めにおいて、前の三つの楽章を回想したりなどはその一例である。

初演は1824年5月7日夜、ウィーンのケルントナートア劇場で行われた。

ベートーヴェンの聴力がかなり衰えていたことは、この曲の初演の際に、指揮者を二人おいたことでもわかる。ベートーヴェンは正指揮者のウムラウフの隣りにあって、実際の演奏とは、くい違ったテンポや表情で空しく空間に弧を描くのみであったという。

「第九」の演奏は練習不足ではあったが、聴衆には偉大な感銘を与え、各楽章の終りには万雷の如き拍手が起った。特に終曲が終わったとき、成功は決定的となった。満堂の聴衆は感激して総立ちとなり喝采を浴びせた。しかし、耳の聞こえないベートーヴェンは聴衆を背にしてボンヤリしていた。見かねたアルトの独唱者ウンガーがかれの袖をひいて聴衆の方を向けたので、かれは初めてこの曲が非常な感銘を与えたことを知り、礼をしたという。聴衆はこの劇的な悲愴な光景に感激し、さらに拍手を続けて、作曲者を五度も答礼のためにステージに出させた。答礼は三回というのが皇帝に対する礼儀なので、警官があわてて聴衆を制したという。

【第一楽章】 Allegro ma non troppo, un poco maestoso

「第九」の規模の雄大さと、劇的な性格は、はやくもこの楽章でも示されている。導入は、天地の混沌を想わせる茫漠とした空5度（第三音がない）の響きで始まる。やがてこの響きのなかから鋭いリズム・モチーフが生起する。このモチーフが圧縮され、第1主題が澎湃（ほうはい）として湧きおこる巨大な塊のごとく聳然（しょうぜん）たる姿をあらわす。ソナタ形式は、いまだかつて、このような主題の出現を経験したことがなかったのである。

第2主題は第1主題と異って、楽しい性格のものである。これにつづく部分も、大体においてこの気分をもち、ときどき第1主題の部分をまじえながら展開部へとつづく。そしてその劇的壮大さは再現部における第1主題への壮烈な導入において、クライマックスに達する。

ワーグナーによると「我々と地上の幸福との間をさえぎる敵意ある暴力の圧迫に対して、喜びを勝ち得ようと努める魂の戦い、極めて壮大な意識で把握された戦いが、この第一楽章の基礎をなしているように思える」である。

【第二楽章】 Molto vivace

およそベートーヴェンの書いたスケルツォのなかで、最も大規模なものである。鋭い付点リズムを含む、むしろ単純なスケルツォ楽想が、およそ考えうる限りのすべての展開を行う。トリオの主題はあきらかに第一楽章のエピソードから受けつがれたものであり、終楽章の「歓喜の調べ」への橋わたしの役を果すことにもなるのである。

ワーグナーは「激しい喜びが、この第二楽章のはじめのリズムで直ちに我々をとらえる。新しい世界の中に我々は入り、そこで陶酔や麻醉へと駆りたてられるからである……」と言っている。

【第三楽章】 Adagio molto e cantabile

讃歌ふうの主題旋律と希望と浄化を象徴するよ

うな明るく美しい第二主題、この両主題にもとづく自由な変奏形式をとっており、叙情的な旋律、色彩的な和声は、宗教的な敬虔さをもって瞑想的に展開され、情熱も闘争もない平和な幸福感が描き出される。

この交響曲の中での一つの頂点であり、ワーグナーは「なんと清らかに天国のようななだめ方でそれ等の音は反抗と絶望におののいた魂のはげしい促しを、やわらかい憂鬱（ゆううつ）な感覚へと溶けさせて行くことが、思い出がごとくに享受したきわめて純粋な幸福への思い出が目ざめるかのように思われる…」といっている。

【第四楽章】 Finale

第1呈示部＝まず管楽器によるあわただしい楽想が奏される。これに対し低弦がレシタティブでこたえる。それから、前の三つの楽章がそれぞれ回想され、低弦のレシタティブによって否定されていく。そしてついに、一つの歓ばしい旋律が現われる。この主題は初めに低弦によって歌われ、くり返ししながら全合奏に至る。

第2呈示部＝この楽章の初めの、あわただしい楽想がもどってくる。やがてバリトン独唱が、力強く歌いはじめ、ついで合唱がそれにつづく、やがて他の独唱も加わり、ひとつのクライマックスをつくる。曲想一転して行進曲となり、テノール独唱が歌いはじめる。そして男声合唱が、力強く歌いくわわる。

再現部＝やがて曲はふたたび「歓喜の調べ」がもどり、合唱が重々しく新しい主題をうたう。やがてこの新しい主題と「歓喜の調べ」とが組み合わせられて、壮麗な二重フーガがくりひろげられ、全曲中のひとつのクライマックスを形づくる。

コーダ＝曲想が一変する。主題旋律の新しい変奏に入り、四人の独唱者と合唱が変化のかぎりをつくして、交互に歌いすすめる。

圧倒的な合唱コーダとなり、合唱の最後は、マエストロとなるが、管弦楽だけが残り、圧倒的な終結を一気に終る。

「県民第九の会」実行委員会

(50音順)

有馬俊一	神田一伸	黒葛原潔	本山洋
岩代和武	草刈秀克	林原隆治	森真一
江橋克巳	蔵岡隆	藤枝昭俊	森義臣
沖津正巳	下田宰城	三浦洋一	山崎崇伸

「県民第九の会」合唱団

インスパイダー 藤枝昭俊 CHORUS

Soprano

〈ソプラノ〉

赤尾ひとみ
足立聰子
荒木美雪
泉谷和子
稲岡福子
井上千秋
岩津喜美子
江端好美子
荻郷尚子
小田雪絵
小塚由美子
大無田由美子
小丸直美子
木村閑子
工藤たみ子
久保恵子
栗原宏子
栗原美奈子
黒田良子
斉藤美紀枝
坂田千鶴
相良香代子
佐藤久美子
塩津礼子
下川京子
管座由紀子
左田中めぐみ
田中裕子
田中誠子
出嶋和子
中野康子
中野良子

中村公子
中村円子
永目浩子
夏野恵子
西野紀香
西嶋のり子
西中和子
橋本和代子
長谷川まる子
馬場圭子
平野淑子
伏水治美子
伏福典子
福田睦子
福永節子
福本恵子
前田深雪子
前田弥生子
前田美弥子
松田綾美子
松永国子
松延一美子
松本美紀代子
松本富美子
松村優子
宮本恵子
宮本純子
村田佳寿子
森田直子
森田鈴子
山本由香子
横田味詠子
吉田知代子
岡和美美子

Alto

〈アルト〉

相川久仁子
赤峰洋好子
阿曾房子
有江朋子
池田三佐子
磯崎ユウ子
井下美穂子
今村政美子
岩下紀子
上原洋子
牛草恵子
有働文美子
大久保庸子
緒方裕子
小山千工子
梶山美佐子
北野貴子
木野千佳子
木原美智代子
木村洋子
清原幸子
吉良圭子
草刈佐紀子
草刈登紀子
久保久美子
熊野たまみ子
栗崎尚子
小森恭子
小森利恵子
小森渡由美子
志柿昌子
莊野玲子
正呂地多恵子
杉本弘子

諏訪澄子
諏訪有紀子
高尾知佐子
高尾百合子
高木麻由美子
高浜令子
高松寿江子
竹田綾子
武原慶子
武原浩子
田中美香子
田中俱子
田玉了子
鶴田ミト子
徳永玲子
徳丸克子
富田裕加子
中尾郁子
長尾恭子
中村公美子
那須裕子
西井邦子
西田久子
西村信子
橋口泰子
馬場美也子
浜崎るり子
浜島玲恵子
原田千鶴子
平井裕子
福島邦子
福本愛子
福山峰子
堀田蘭子
牧香代子
正木路子

Tenor

〈テノール〉

益田紀志子
榊田紀子
松岡英子
松川嘉子
松本節子
松本幸子
松山典子
三隅ひろ子
村上桂子
森上友美子
安田昭子
山本大子
弓削由美子
吉田伸子
和田裕美子

Tenor

〈テノール〉

天羽伸哉
石田浩二
板倉幸之輔
井上正彦
岩本真美
犬童和生
上杉祐幸
内田勝幸
江迫明水
大野昭雄
大村栄二
荻山健一郎
小野勝節
工藤節基
小塚田賢一
坂口智則

下田真也
下林豊八
仙波洋広
高橋雅裕
田尻象二郎
谷口昌秋
千島正孝
中野昌喜
野田貞至
馬場賢一
岡尾文衛
松下衛

松田省一
水谷秀崇
吉原道彦
六田祐史
渡辺信之
渡辺不己夫

Bass

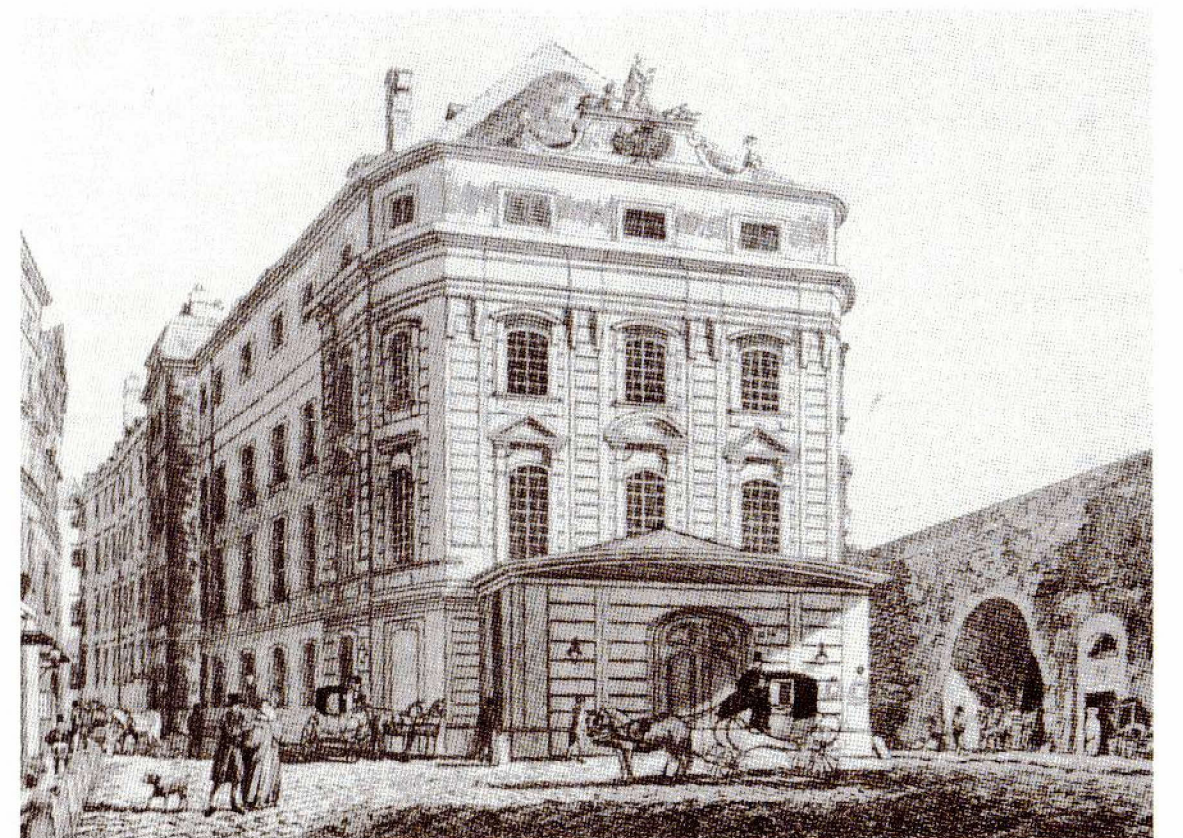
〈バス〉

赤塚恒幸
阿曾田正宏
有江俊隆
一甲宜男
岩間源二郎
岩村勇児

宇都宮貴俊
衛藤純一
大墨通夫
大津敬一郎
岡秀樹
岡本秀一郎
小川恵右
甲斐喜三男
甲斐清美
勝目康裕
河野清治
神田伸博
木村信博
清原直行
草刈秀克

草刈秀士
小嶋祐一郎
小林利弘
小松裕長
坂村浩二
柴田康二
白石啓二
酢谷海祥
瀬我部伸二
反後英治
手塚康彦
中園和一
中山健

西嶋幸生
西本一成
橋口光徳
橋本新十郎
林田興文
東川旭
樋川光顕
平田辰巳
福山愛也
富士井隆文
松島和寿
山崎浩徳
山下順三



「第九」の初演が行われたケルトナートーア劇場

〈コンサートマスター〉
鶴 和美

〈1stヴァイオリン〉
阿波和江 子
石田素子
大塚操
大宮伸二
上河幸彦
紙本剛美
木崎珠子
木村宣子
桑原敦子
田中知子
黒葛原契子
鶴和美子
長坂浩子
萩原由美子
原雅子
広瀬卓
山崎崇伸
吉永誠吾

〈2ndヴァイオリン〉
岡純子
川口裕子
清永健介
草野正夫
国米秀幸
小柳敦子
小堺久美子
高本信夫
田上るみ子
角田整保
豊永恭子
中川信弘
野田和子

野元明子
東真知子
平井隆博
深田聡
前田くみ子
松崎浩二
宮本吉辰
村田和穂
本山洋
横手とし子
吉永裕子

〈ヴィオラ〉
荒木拓実
牛島啓子
緒方肇
太田由美子
清元晃
国府慶作
卓場立太郎
杉原由江
沼田義治
徳永一寿
每床教子
松野多恵
水田剛
吉田美智子

〈チェロ〉
内田園子
片山玲子
坂本一生
士野優
高浜秀光
辰野佳子
津田一彦

長尾和治
長坂輝喜
深松真也
福永憲包
本田義信子
三浦純子
水原真純
山中史朗

〈コントラバス〉
古泉俊彦
国米稔
重田まゆみ
田上博子
津曲肇
歳田和彦
平川和秀

〈フルートピッコロ〉
隈紀子
柴田芳江
渡辺勝利

〈オーボエ〉
片岡久哉
辰野裕昭
宮本千草

〈クラリネット〉
田中久美子
溜渕孝二
原敏郎
古沢嗣佳子
保田明子

〈ファゴット〉
黒田孔太郎
小林太郎
田畑博美
蓮沼昇

〈ホルン〉
上村久直
後藤滋行
田畑博行
高橋毅
黒葛原潔
安松真司

〈トランペット〉
市原彰
中野真一郎
堀江幸司

〈トロンボーン〉
是松幸二郎
辻田清次
米村宏

〈打楽器〉
金坂義徳
白尾友宏
杉本奈穂子
津森恵子

Beethoven's Portraits



ベートーヴェン

1818/19年、フェルディナント・シモン原画によるエドワード・アイヘンスの銅版画。